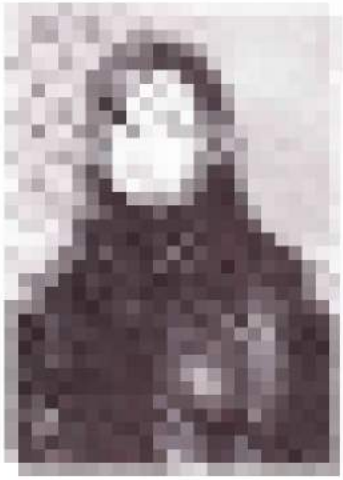
UNA VOCE



アルベルト・ガザーレ

Alberto Gazzale

★バリトン

6月、ボローニャ歌劇場《トロヴァトーレ》で再来日する日本公演でテノール

6年前、スカラ座の来日公演でほとんど無名のまま《リゴレット》の題名役を歌い、世界中の新聞が「ガザーレのリゴレットが東京で大勝利」と書き立て、国際的キャリアが始まったアルベルト・ガザーレが、ボローニャ歌劇場の《トロヴァトーレ》で再来日する。当時と同じプロダクションでの《リゴレット》を改装後のスカラ座で準備中の彼にインタヴューすることができた。

●

《トロヴァトーレ》はスカラ座でムーティと勉強し、その後、オーレンとアレーナ・ディ・ヴェローナで、他にもパレルモで歌いました。他の役に比べて歌っている回数が多い方ではありませんが、自分の声に向いていると思います。相手役のデッシーは、僕にとって現在最高のソプラノです。彼女とは《アイーダ》や《シェニエ》など、いくつも共演しましたが、音楽の作り方が似ているので、素晴らしい二重唱を披露できると思います。そして僕の伯爵の最大の聴かせどころはアリアです(と言って、アモールと歌い出す)。これはレオノーラに本気で恋している男の歌です。マンリーコも伯爵も運命に翻弄された若者ですが、伯爵の方がより恥しがり屋で繊細なところがあると思います。レオノーラを含む屋敷中のすべての女性と無理に関係を持てる地位にいるのに、そうしない。レオノーラに迫って、彼女が死ぬ決意で身を差し出すと、「えっ、どうしよう!?」という動揺が感じられる。そういう上品な面と、真面目で激しい感情の多面性を表現し、音楽的にはヴェリズモよりの表現よりもドニゼッティに近い、初期のヴェルディのスタイルに即した歌い方が僕の伯爵です。

実はデビューも1990年カリアリ歌劇場来日公演で、2度目のスカラ座来日公演では世界への扉が開かれたので、僕にとって日本は縁起がいいのです(笑)。2008年にはジェノヴァのカルロ・フェリーチェ歌劇場来日公演が決まっており、今後定期的に日本の皆さんにお会いできることを嬉しく思います。

(取材・文・写真=中 東生)